

「京町家からみる京都のまちづくり」

直野 祥子

(岡崎宏樹ゼミ)

はじめに

2012年、米国の有名旅行雑誌「Travel+Leisure」が発表した人気観光都市調査「ワールドベストアワード」で、京都は世界の第9位に選ばれた。年間5000万人近くの観光客が訪れる京都は、日本を代表する観光都市というばかりでなく、いまや世界有数の観光都市といえる。また京都は「大学のまち」「学生のまち」としても知られ、観光客だけでなく、多くの若者たちを惹きつけているⁱ。

私は東京出身であるが、修学旅行や個人旅行で訪れた京都に惹かれ、大学はこの地で学ぶことを選んだ。しかし京都で京都について学ぶと、魅力と同時にこのまちが抱える課題も見えてくるようになった。私が特に強い関心を抱いたのが京町家の減少という問題である。京町家は京都の歴史・文化・生活を集約するものだ。だから京町家が失われるということは、伝統的な建物が減るということにとどまらない大きな問題なのである。

本論は、京町家と呼ばれる建物がどのような変遷をたどって現在に至るのか、その歴史を概観し、町家の現状を確認したうえで、京町家を保存・再生する活動に光を当て、この活動から見えてくる町家の価値について検討する。この作業を通じて私たちは、京町家が生活文化の宝庫であり、コミュニティ活動の拠点であり、京都の歴史・文化・生活を集約する結節点であることを明らかにしたい。

1. 京町家からみた京都の景観変化

1-1. 誕生と進化

京都の地に町家が誕生したのは平安時代である。平安京遷都と同時に東市、西市という二つの

市が立てられたが、市で物を売る所を「店家」とし、これを「マチヤ」と呼んでいた。しかし「店家（マチヤ）」は現在、私たちが知る住居としての「町家」の直接のルーツではない。住居としての「町家」は、平安時代の貴族の日記や『今昔物語集』などにしばしばみえる「小屋」「小家」である。10世紀後半の平安京の様子を伝える『池亭記』には、「高き家は門を比べ、堂を連ね、少（小）さき屋は壁を隔て、のきを接ぬ」との記述がある。この頃に描かれた絵画や絵巻には、市街にある貴族の邸宅のほか、庶民の住居が隣あって建ち並ぶ様子がみられる。11世紀になると、店舗兼住居の形態をとる「小屋」「小家」が現れるが、これが職住を兼ねた現在の町家に近い建物と考えられる。

次に、町の区画の変遷に目を向けよう。平安京の時代、京都のまちは東西南北を走る通りによって構成され、四辺の道にオモテを向けた「四面町」が形成されていた。ところが室町時代頃になると、それが対角線で仕切られた「四丁町」に変わり、応仁の乱前後には四丁町の道をはさんで対面しあう「両側町」に変わった（図1）。町の形の変化と共に、街区の真ん中にあった共同施設（井戸や便所、ゴミ捨て場など）もそれぞれの家内や敷地の中に作られたり表通りへ移されるようになった。そして「両側町」が形成された頃から、通り（道）を介して表土士の付き合いが密接化していった。

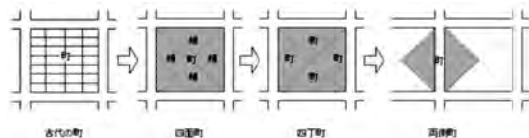


図1 両側町成立の過程

ところが応仁の乱[1467-77年]が京都の町に壊滅的な打撃を与え、市街地の多くが更地になっ

i 2011年の学校基本調査（文部科学省）によれば、人口あたりの学生数が最も多いのは京都府である（第二位は東京都）。

「京町家からみる京都のまちづくり」

てしまった。その後、豊臣秀吉の大改造によって町割は細分化され、「うなぎの寝床」といわれる間口の狭い奥行きが深い独特の景観ができ上がって、家屋の密集度がいっそう高まった。この頃の町家の外観は平安末期とそれほど変わらないが、敷地の奥の使われ方に二つの変化が表れた。一つは茶室の設置であり、もう一つは借家（裏借家）の建造である。

江戸時代は初期と中期以降で町並みが大きく変わる。初期は桃山風の豪華で活気に満ちた文化傾向が反映され、町には2階建や2階建、祇園祭などを見物するための櫓がのった家などバラエティに富んだ町家住居が建てられた。「洛中洛外図」をみると、屋根や正面外観にも意匠を凝らした個性豊かな家々が建ち並んでいる様子が見られる（図2）。

江戸時代中期になると、幕藩体制のもとで派手な家や3階建が禁止され、規制によって一階の底はほぼ一直線で均一な家並みが作られるようになった（図3）。この変化をもたらした要因としては、建物の規制に加えて、建築部材の規格化・標準化による「建設のプレハブ化」が均質な建物の大量生産を可能にしたこと、流通システムが整備されたことが挙げられる。



図2 江戸時代初期の町家



図3 江戸時代中期の町家

1-2. 近代化

明治から昭和にかけて町家はさらに変容を遂げる。その大きなきっかけとなったのが元治元年[1864年]の禁門の変（蛤御門の変）である。このとき北は一条通りから南は七条・東本願寺にいたる街区や社寺があまねく焼き尽くされた。このため明治以前に建てられた町家はほとんど無くなってしまったのである。

新しく建てられた町家は江戸時代に引き続き2階建の造りのものがほとんどであったが、京都府から3階建・4階建の建築を許す通達が出され、文明開化の影響で赤レンガの洋館も建ち始めた。

大正になると「ハイカラ」な和洋折衷の町家も登場する。出格子をやめて窓に真鍮パイプ製の格子^{しんちゅう}を建て込んだもの、御影石やタイル貼りなどの腰壁^{おし}を設けたもの、建具として襖の代わりに東障子（ガラス障子）が入ったものなどがその代表である。通りに面して高い塀^{だいべいづくり}を建て、通り庭を介して母屋が建つ「大塀造」もこの頃出現した。現在も残る大塀造の代表的な建物として「紫織庵」^{しおりあん}がある（写真1）。



写真1 紫織庵

昭和に入ると、京町家の新築が徐々に減少し、昭和10年頃を過ぎると、若干の例外を除けば、新しい町家はほとんど建てられなくなった。建築基準法（昭和25年）が木造の京町家を「既存不適格建築物」としたことも、減少に拍車をかけた。次々と新しい建材や工法が導入され、多様な材料を使用した住宅が安く大量に提供されるようになって、京町家が減ると、大工や左官、建具屋など町家に関わる職人の数も減少した。

高度経済成長は京の町並みに根本的な変化をもたらした。好景気の商業地では古い町家が次々とビルに建て替えられた。バブル期には地価が高騰し、土地の税金を支払うために多くの所有者が町

家の売却を余儀なくされた。バブル崩壊後は売却された土地に新しい建物が建てられず、コインパークになった場合もある。こうして高層ビルやマンションの谷間に古い京町家が点在するのが現在の京都の町中風景なのであるⁱⁱ。

1-3. 実態調査とさらなる減少の要因

では、現在の京町家はどのような状況にあるのだろうか。

1995年に「京都市心町家調査ⁱⁱⁱ」が行なわれるまで、町家がどこに何軒あり、どんな人が住んでいるのかは分からないままであった。この初めての実態調査によって、都心の田の字地区^{iv}には8021軒の木造建築物があり、その9割以上が伝統様式を備えていること、地区ごとに町家の数もタイプが違い、保存の具合や建物の傷み具合も異なることがわかった。

1998年に京都市都市計画局が実施した「京町家まちづくり調査」では、都心部で2万8千軒の町家があることがわかった。2003年の調査では2万5千軒となっており、5年間で約10%減ったと推定された。2万5千軒は京都市内の全住宅の3.9%、国や市の文化財に指定・登録されている町家は15軒にすぎない。

京都市内全域では、2010年8月の調査で4万7735軒が確認されたが、10.5%は空き家であることがわかった。江戸時代の町家は全体の2%で、明治時代のものは14%であった。築年数が100年近いものは老朽化し、防火・耐震の問題が深刻であると指摘された。近年は全体で毎年2%ずつ減っていると推定される。

このような調査が進められていく中で、京町家が減っていく要因も明らかになってきた。京町家の約8割は小さく狭い敷地に建てられている。小さい家は相対的にみて保存状態も建物状態も悪いが、建替えが難しく、老朽化してもそのままにされているものが多い。このため住民は「町家は老朽家屋」というマイナスのイメージをもってし

まっているのである〔宗田2009：16-32〕。

しかしながら、総じて町家の数が減少する一方で、町家を再生し、その価値を再発見する活動や、これを積極的に商業や観光に利用しようとする動きも展開しつつある。次章では、このような動向を見ていくことにしよう。

2. 京町家再生とまちづくり

2-1. 町家ブーム

まず近年のいわゆる「町家ブーム」についてみておこう。

この20年ほどの間に「町家再生店舗」がひとつのブームとなった^v。町家を改造してレストランなどに店舗利用するケースは1990年頃は珍しかったが、町家ブームが始まると、2002年には700軒、いまでは1,500軒を超えている。1990年代は物販系が多かったが、2000年代となると飲食系が圧倒的に増えた（写真2）。京都でタウン誌を発行するリーフ・パブリケーションズ社は、京都の町家レストランを特集した冊子を発行した（『京都・町家でごはん100』2002年）。30歳前後の女性をターゲットにした『月刊 Leaf』誌は『町家でごはん』シリーズを刊行し、半分以上を東京で売り上げた。これらの雑誌には、若い女性が町家で食事を楽しんでいるグラビアが多数掲載されている。「町家再生店舗」は、従来、町家には縁がなかったが、和の空間を新鮮に感じた人たち、とりわけ若い女性たちを惹きつけたのである。町家を飲食店などの事業に活かす人々の成功は、若者を中心に町家への関心を高めた。行政も町家の積極的利用を支援し、相続税を改善するなど、保存・再生に力を入れ、「お洒落な町家暮らし」というイメージ戦略を後押しした。その結果、町家の経済的価値が再評価され、壊さずに使おうという動きも広まった。

しかし問題もある。町家本来の良さを活かさない形で改造されたり、伝統的な建築方法を無視して修繕されたケースはその典型である。外観だけ

ii 以上、歴史的記述に関しては〔淡交社編集局2009〕〔宗田2009〕を参照した。

iii トヨタ財団1995・6年度助成研究による調査。

iv 丸太町通、河原町、五条通、堀川通の内側。ただしこの調査では西側を大宮通まで広げている。

v これと一線を画するものとして、学者や文化人が後押しした「町家ブーム」がある。2000年代には公開町家の見学ツアーが多数企画された。また街中の京町家を紹介する「町家本」の出版が相次いだ。これらは失われゆく伝統的な町家の美しさを論じた、美術・建築・文化面からの町家論が中心であった。

「京町家からみる京都のまちづくり」

を重視した不自然な改装は、町家に備わっていた耐震性や防火性能を損なうことにもなる。町家の空間は、防災を含めた暮らし方の知恵が詰まっているのに、それらが活かされていないのである。そうした場合、和風の見かけとは裏腹に、そこには京都の伝統や文化はまったく継承されていない。これで町家の保全といえるかは確かに疑問である〔宗田 2009：148-68〕。



写真2 SECOND HOUSE 東桐院店 [1994年～]

2-2. 町家再生事業

町家ブームには功罪があるにせよ、保存・再生の活動を活発化するには絶好の機会である。町家の保存・再生を持続性のあるものにするためには、町家が備えている暮らしや建築技術の知恵を理解し、それを引き継いで活かしながら、新しい技術も取り入れていく必要がある。

町家の保存・再生の取り組みにおいて、先駆的役割を果たしたのが、1992年に設立された市民グループ「京町家再生研究会」である。1999年には、技術的な保存、改修を行なう「京町家作事組」と町家に住む人が中心に集まり、京町家の暮らしや文化の継承を目指す「京町家友の会」が結成された。2002年には地元不動産業者が京町家に住みたい人と貸したい人の橋渡しをする「京町家情報センター」が誕生した。こうして総合的に事業が展開することで、保存・再生・改修の仕組みが整い始めた。

「京町家再生研究会」は、京町家の造りに詳しい建築家や大工・職人の技術者、京町家について学識がある研究者、実際に住んでいる町家居住者が集まって設立された特定非営利活動法人(NPO)である。京町家の再生を目的とし、町家の歴史あるいは現状に関する研究や調査、町家・町家街区の再生に向けての技術・技能の維持・継

承、町家再生の実践、また、講演会などの広報も行なっている。

「京町家作事組」は、京町家再生研究会を母体とした実際に再生に携わる職人集団である。設計事務所、工務店、左官、瓦職など様々な職種で構成され、京町家の改修に対する相談も受けている。相談があれば現地調査とヒアリングを行い、改修工法を提案する。必要があれば、設計者や施工者の紹介も行なう。再生事例を重ね、適正な工事金額での再生、維持管理の支援を行なっている。近年は、不適切な見積を出し、質の悪い仕事をする業者の監視もしている。

「京町家友の会」は、町家の作り手だけでなく、住居者や保存・再生に関心がある人を中心に集めようと発足された愛好者の会であり、住まい、食、祭りなどを通して歴史ある地域と住まいにおける暮らしを見つめなおすことを目的としている。会員は増え続け、町家暮らしの文化的価値を幅広く浸透させてきた。活動としては、改修工事中または改修工事後の町家の見学や町家職人の技術の勉強会、住み続けるための意志と悩みを語ることなどに重きを置いている。

「京町家情報センター」は、京町家再生研究会と当センターの主旨に賛同し、共に活動していこうとする不動産業者によって構成されている。空いている京町家の売り情報や貸したい人、借りたい人、買いたい人の情報を集積し、その中で条件とマッチングするものを案内する。空いている町家とそれを活用したい人を結びつける役割をすることにより、現存する京町家が保存・再生されることを目的として活動している〔京町家 net〕。

2-3. 町家再生をとおしたまちづくり

町家再生はたんに伝統的な建物を保存するだけの活動ではない。重要なのは、この活動を通じて市民活動が活発になり、新たな絆やネットワークが生まれることである。「京町家再生研究会」は専門家中心の集まりであった。しかし、町家を楽しみ、いつの日か町家に暮らしたいと思う「未来の住民」が「京町家友の会」に集うようになると、そこに専門家に留まらない人のつながりが生まれるようになった。

2000年代に入ると、町家を自由に楽しむイベ

ントもいろいろと行なわれるようになった。その一つが2006年に始まった「楽町楽家」である。京町家ネットが全国町家再生交流会に合わせて企画したこのイベントでは、40軒ほどの町家を会場にコンサートや講演など多様な企画が展開される。この企画は文化遺産である町家と京都の現代文化を結びつけ、新たな文化を創り出す試みといえる〔宗田好史 2009：186-204〕。

このように、町家の再生は、文化の継承だけでなく、コミュニティ再生やネットワーク創造の契機となる活動であることがわかる。

古くから京都はコミュニティのつながりが強固なまちであった。町は道を境界線とせず、通りに面した向かい合う家々が構成された（「両側町」）。一つの町を形成する数は少ないが、その分、密接な結びつきがあった。町家は職住が共存する住居のため、同種の職業の人々が近くに集まり、町を形成した。そこから、西陣に代表されるような、高い芸術性を誇る手工業も発展した。

町内会は「お町内」と呼ばれ、町内居住者にとって日常生活を送るのに重要な役割を果たしてきた。「お町内」には決まりごとが多いが、決まりごとさえ守れば、季節感と情緒あふれる豊かな暮らしを送ることができる。町内会組織は、防災や防犯、地蔵盆、各種の情報伝達などを行ない、居住者の親睦に寄与する。各世帯への連絡は、回覧板によって伝えられる。回覧板は家から家へ伝達されるインフォメーション・システムだが、人の手から手へと伝えられることで可能になるコミュニケーション・システムでもある。地蔵盆をはじめとした町内の行事は、住民に強い季節感を与え、町の一体感を醸成する〔島村・鈴鹿 1971〕。

けれども、高層マンションと町家が混在する現在の「お町内」は、もはやかつてのやり方だけでは運営しづらいのも現実である。今後は新旧の住民や内外の住民の関わりを前提とした、新たな町家暮らしやコミュニティのあり方が模索されることだろう。

3. 伝統と現代

3-1. 新しい町家暮らし

では、次に、新しく町家暮らしを始めた人たちに光を当ててみよう。いまや京都の町家に住んで

いるのは京都生まれの京都人だけではない。最近では、京都以外から来た若者やアーティストが町家で暮らすケースも増えている。

日蓮宗本門法華宗大本山・妙蓮寺の僧侶、佐野充照住職が始めた「西陣活性化実顕地をつくる会」は、地域のネットワークづくりを進めるうちに、「西陣織の産地の継承はアーティストの集まりから始まる」との考えに立った活動を展開するようになった。西陣は伝統的な職人のまちで、下町情緒のある長屋の町家が多く、この地区に残る町家を工房・住居・店舗に活用したいアーティストらと家主を結ぶ仲介システムが立ち上がった。その活動は、1995年に「ネットワーク西陣」、1999年からは「町家倶楽部」の名称で展開し、これまでに170組以上のアーティストとその家族らの入居を支援してきた〔宗田 2009：192-3〕。

西陣以外にも同様の取り組みがある。最近メディアの注目を浴びているのが「あじき路地」（京都市東山区）である（写真3）。近辺の路地は、細く奥深く、家々が向かい合って並んでいるため、他人が簡単にふみこめない凛とした空気が漂っているが、若者が職住一体で開いているショップが数軒並ぶ「あじき路地」は、他とは違った独特の雰囲気がある。ここは長年空家になっている長屋だったが、大家さんが「ものづくりなどを頑張っている若者に使ってほしい」と2004年春に入居者を募集した。書類選考ののち「お見合い」という形で直接会い、約100件の応募の中から6件の入居者が決まった。当初はほとんどの屋根瓦がずれ落ち、畳や壁はボロボロ、ガラスも割れていて、とても住めるような長屋ではなかったが、入居者で手を入れて大改装し、入居に至った。こうして入居者たちが大家さんを「お母さん」と慕い、みなが家族のように暮らす、町家長屋が誕生したのである〔京都町家 あじき路地〕。

若者たちによる取り組みもある。例えば、「CHOBO」は、京都市文化財マネージャー育成講座一期生によって2009年に結成された「まちぐらし集団」である。彼らは「まちぐらし」を提案・応援・発信することを目的に活動を開始した。「CHOBO」という名称は、若者が地域に根づきながら町家暮らしを楽しむライフスタイル＝「まちぐらし」を広げていきたいという思いを込め、

「京町家からみる京都のまちづくり」

「町暮」から名付けられた。彼らは、町家暮らしに関わるイベントの企画・運営、若者の「まちぐらし」に関する広報、講演活動など、多彩な形で活動を展開している。



写真3 あじき路地

3-2. 丁寧な町家暮らし

立派な京町家が、洗練された美意識で彩られた伝統的建築として非常に高い文化的価値をもつことは多くの人が論じるところである。けれども、町家本来の価値は、美術的鑑賞によって発見されるのではなく、そこで暮らしが営まれることで見出されるものである。生活や職業の営みがあってはじめて町家は、生きた文化財になるのである。

ここでは、100年を越える立派な町家で暮らす二人の女性を取り上げて、町家で暮らす価値は何かを考えることにしよう。

小島富佐江さんは、1985年の結婚を機に、百足屋町の元呉服商の町家での暮らしを始めた。その後、義父の相続にかかわり、都心部の町家の相続税問題に直面した。これを契機に、京町家再生研究会活動に参加し、97年から事務局長を務めている。また自宅を拠点に「京町家歳時記」を主催し、講演や著書『京の町家 丁寧な暮らし』『京町家の春夏秋冬』によって、町家暮らしの魅力を伝える活動を続けている。小島家は110年ほど前に建てられた京町家の代表格の建物で、改装を経て2008年から京都学園大学が表屋部分を3部屋の教室として使用している(京町家キャンパス「新柳居」)。

小島さんはいう。「私が住んでいる家は、預かりもののなのです。預かっている以上、大切にしないとイケません。次にどなたかにお預けするのか、お返しするのか分かりませんが、常にこのことを意識して暮らしています」。だから、家は住居の道具ではない。そこにあるのは「家と暮らす」感

覚であり、「家は家族」なのである。

町家に暮らしていると「自然に逆らわず、無理をせず」ということが基本になる。暑いときには暑く、寒いときには寒さを感じながら暮らす。その「ちょっと辛抱しているというきもち」が「暮らしのハリ」となる。家の修繕や手入れは必要だが、手入れを含めて「家と暮らす」のなかに楽しみがある。明治生まれの家と向き合って暮らしていくためには、日々、月々、年々やらなければならないことがあるが、家とのつきあいのなかで自然とのかかわり方を学ぶ。「家が季節を教えてくれる」。古い木造建築は繊細な関わりを要求するが、それに応えた「丁寧な暮らし」のなかに豊かな感性が息づくことになる。そして、その感性は人とのつきあいにも広がっていくのである。[小島2004]

秦めぐみさんの暮らしの場である秦家住宅は、築およそ140年の立派な京町家である。1700年創業の伝統的商家であったが、1983年に表屋部分が京都市登録文化財となった。その後、自宅を公開するようになり、現在は料理教室「料理の会」や茶会、講座の開講などの活動も行なっている。ここで作られる料理は季節のおばんざいで、祖母や母から受け継いだものである。四季折々のおばんざいは「季節を味わい」、「暮らしを味わう」ものである。

京都の暮らしには年中行事が欠かせない。秦家では毎年多くの人を招いて餅つきなどの年中行事を続けている。秦さんによれば、「正月、節句、祭と年中の歳時ごとに迎えるハレの日の室札に家の中を調べると背筋はピンと伸びてあらたまった気持ちになる」。たくさんの人と関わり、暮らし続けることで家を守り、家が家族を守る。

そこには「季節の変化を感じずには過ごせない日常がある。心地よい時候は無論のこと、北風の冷たい日、むせ返るような暑い日、できるだけ機械物には頼らずにあの手この手を駆使して快適に過ごすための知恵をしぼる。殊に台所仕事はそうした日々の中核にあって、暮らしの彩りというのはなんと豊かで忙しいものと関わるほどにつくづく思う」[秦家住宅編集委員会2008, 3R低炭素社会検定]。

小島さん、秦さんの暮らしから見えてくるのは、

町家が与えるものを受けとるところに、町家暮らしの豊かさがあるということだ。町家は生活の知恵の宝庫であるが、その知恵は季節に彩られた丁寧な暮らしのなかで初めて知られる。建物を保存するということは、そのような知恵や価値観を継承することと不可分なのである。

3-3. 伝統と現代の融合

最後に、京町家を観光資源として再生する道を切り拓いたアレックス・カー氏の取り組みを紹介したい。

カー氏は著書『美しき日本の残像』[1993年]でも知られる、アメリカ生まれの東洋文化研究家であるが、亀岡に在住し、地方の古民家の再生事業、観光振興、景観保全活動にも精力的に取り組んでいる。2003年、京都の老朽化した町家が放置されていることを懸念して、梶浦秀樹氏、根岸良子氏とともに株式会社庵を設立し、9軒を修復して宿泊施設として開業した^{vi}。庵の方針は、古い町家の歴史と伝統を重ねた美しさはそのままに、現代の住まい手になじむ快適な工夫を新しい技術によってそこに加え、「住み続ける形」で残すことにあった。

文化都市を構成するのは特別な文化遺産だけではない。京都は歴史的な神社仏閣や庭園には恵まれているが、美しい町並みはその多くが失われてしまった。町並みを保存するには、古さと新しさを融合させる高度な技術が必要になる。ところが、日本は近代化を進める中で、伝統的なものと現代的なものを融合させる技術を発展させることができなかった。そして、「古い＝不便」というマイナスのイメージが強く浸透し、古いものが次々と壊されていった。京都の町家や町並みもそのひとつである。

日本の修復テクノロジーは65年を境に成長を止め、以来古いものをそのまま完璧に保存する方法しか考えてこなかった。そのため、古い建物の持つ温かみと雰囲気、新しい建物に魅力的に生かそうにも、その手法を知っている人がいない。「テクノロジーの固定化」

の結果、日本は「古い＝不便」と「新しい＝味気ない」という両極端のあいだで引き裂かれている。古い不便さ、新しさと味気なさ、この断絶を埋めるものがない状態、それが現代日本の街の風景だと言えるかもしれない[カー 2002: 178]

カー氏がこのように書いてから10年余りが過ぎ、町家再生の活動や景観を見直す動きも次第に盛んになってきている。カー氏が重視するのは伝統の良さを現代生活と調和させて残していくことである。その一つの方法が開発地域と景観保存地域を明確に分けるゾーニングの都市計画である。あるいは現代のテクノロジーを駆使して、伝統的建築を観光資源として活用する試みである。

カー氏の取り組みは、古いものに手を加えずにそのまま残そうとする保守的な立場からは批判的に見られるであろうし、生活してこそ町家という考えからすれば、居住者のいない貸しの宿泊施設は本来の町家の姿ではないということになるだろう。けれども、「本来の町家」だけにこだわると、文化財に値するほど立派なつくりの建物は別として、大多数の「普通の町家」は老朽化し、やがて失われることにもなりかねない。それゆえ、「普通の町家」を大切に残留するための一つの方法として、カー氏らの取り組みは重要な意義を持つのではないだろうか。

おわりに

このように見てくると、町家の保存・再生の運動は、考え方や背景の異なる人々がさまざまな利害関心で関わりあう動的な多様体であるように思えてくる。その中心は古くからの地元住民や職人、商売人、町家の専門家たちである。その周囲には、町家暮らしに特別な価値を見出し、新たに住み始めた若者やアーティストらがいる。その隣には、町家を宿泊施設、レストラン、販売店舗として新たに活用しはじめた一群がある。さらには、老朽化しつつある数多くの町家を未来の住人に託すための活動をする人びとがいる。この動的な多様体は、町家と共に暮らす人びとから、町家ブームに

vi 2010年11月にカー氏は株式会社庵の取締役会長を退任している。

「京町家からみる京都のまちづくり」

便乗する人びとまで、さまざまな人のさまざまな関わりから構成されている。

この多様体の調和を考えるためのキーワードが、コミュニティとネットワークである。京町家は、近隣との交流を育みつつ、プライベート空間を確保する独特の構造を備えている。町家はコミュニティに対し、閉じつつ開かれた建物であり、広範囲の関わりの中に存立する。その特性を基点に置くことが町家を活かすことにつながる。町家をコミュニティとネットワークの結節点として活用するとき、町家の再生は社会の再生の意味を持つ。

とはいえ、町家の未来にとって重要なのは、あらゆる関心を一点に収斂させることなく、多様性を多様性として認めつつも、「町家に学ぶ」という態度を失わないことであるように思われる。というのも、町家はこの千年の都が育んできた知恵の宝庫であり、それを簡単に汲み尽くすことはできず、「発見し続けること」が町家の価値を高めることにほかならないからである。京都はつねに新しいものを取り入れながら伝統を育んできたまちだ。伝統と革新の融合こそがこのまちの発展の原動力であった。町家再生の取り組みも伝統の価値を見据えて、現代との調和の道を模索する中で、また新たな価値を創造していくに違いない^{vii}。

【参考文献・ウェブサイト】

- 高橋康夫, 2001, 『京町家・千年のあゆみ 都にいきづく住まいの原型』学芸出版社
 宗田好史, 2009, 『町家再生の理論 創造的まちづくりへの方途』学芸出版社
 財団法人 京都市景観・まちづくりセンター編, 2009, 『京町家の再生』光村推古書院
 飯田昭, 南部孝男, 1992, 『歴史都市京都の保全・再生のために』文理閣
 京町家作事組編, 2002, 『町家再生の技と知恵—京町家のしくみと改修のてびき』学芸出版社
 島村昇・鈴鹿幸雄, 1971, 『京の町家』鹿島研究所出版会
 上田篤, 1976, 『京町家・コミュニティ研究』鹿島

出版会

- 寿岳章子, 1992, 『京に暮らすよろこび』草思社
 山本茂, 2003, 『京町家づくり 千年の知恵』祥伝社
 淡交社編集局, 2009, 『京の町家案内 暮らしと意匠の美』淡交社
 小島富佐江, 1998, 『京町家の春夏秋冬—祇園祭山鉾町に暮らして—』文英堂
 小島富佐江, 2004, 『京の町家 丁寧な暮らし』大和出版
 秦家住宅編集委員会, 2008, 『秦家住宅 京町家の暮らし』新建新聞社
 アレックス・カー, 2002, 『犬と鬼—知られざる日本の肖像—』講談社
 「京都町家資料館」<http://craft.kyoto-np.co.jp/index.html> [以下ウェブサイトはすべて2013年1月30日最終閲覧]
 「京町家 net」<http://www.kyomachiya.net/index.html>
 「京都市景観・まちづくりセンター」<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/index.html>
<http://www.research.kobe-u.ac.jp/rcuss-usm/research/denken.html> (辻内源太郎修士論文)
 「季節のおぼんざい 秦家の四季」<http://www.kyotoarashiyama.jp/hatake/profile.html>
 「京都秦家」<http://www.hata-ke.jp/>
 「京都町家(町屋)の庵」<http://www.kyoto-machiya.com/>
 「京都町家 あじき路地」<http://ajikiroji.com/>
 「3R 低炭素社会検定」ホームページ:「トップメッセージ vol.12 21世紀の水先案内 秦めぐみ」http://www.3r-teitanso.jp/top_message/hatamegumi.html
 「まちぐらし集団 CHOBO」<http://chobo.nobody.jp/>

【図・写真】

図1「京都市景観まちづくりセンター」<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/about.html>

図2 京都国立博物館編, 1997, 『洛中洛外図: 都

vii 本論は統計的なデータや若干の個別事例しか取り扱うことができなかった。残された課題は多いが、よりミクロな視点から町家ごとに異なる事情を把握しつつ、それぞれの住民が抱える問題を具体的にみていく作業は不可欠であろう。

の形象 - 洛中洛外の世界 p164』淡交社

図 3 「京都市文化観光資源保護財団」 http://www.kyobunka.or.jp/tradition/part_03/index.html

写真 1 「京都観光 Navi」 <http://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?InforKindCode=1&ManageCode=5000090>

写真 2 「SECOND HOUSE」 <http://www.secondhouse.co.jp/cakeworks-kao.html>

写真 3 「京都プラザホテル」 http://www.kyoto-plazahotel.co.jp/blog/2012/08/file_1075.html